

片倉家伝来陣羽織二領 上

内容

- 一 はじめに
- 二 (1) 牡丹・蓮唐草文様黄緞陣羽織
伝来
形状・法量・仕立て方
裂地・文様
(以上本号)
- (2) 黒羅紗・繡取織木綿縫い合わせ陣羽織
伝来
形状・法量・仕立て方
裂地・文様
- 三 結び

一 はじめに

宮城県白石市しろしの旧白石城主片倉家伝来の染織品に関する美術研究誌上既発表拙稿は、三〇三号（昭和五一年発行）論文の「片倉家並びに日光・東照宮伝来の小紋胴服二領について」及び、三三二号（昭和六〇年発行）研究資料「片倉家伝来小紋胴服の修理及び復元模造について」の二稿である。

この二稿で取扱った片倉家伝来の物件は、何れも昭和五三年六月一五日に重要文化財に指定された「小紋胴服」一領に関するものであるが、片倉家は、この胴服以外にも、桃山・江戸初頭の服飾品が三領あり、そのうち一領

片倉家伝来陣羽織二領 上

神谷 榮子

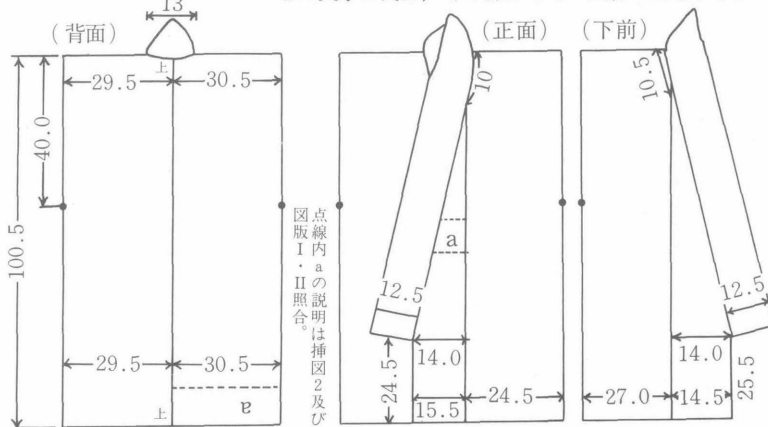
は、筆者が昭和三四年一〇月九日（金）に美術史学会総会で口頭発表した「片倉家伝来二代重長所用黒繻子小袖」であり、これは至文堂発行の拙著「小袖」（日本の美術67）に、34図の表、36図の実測図、50図の写真で正面・背面の全形が示してあり、江戸初頭の、数少いうぶな形態（当初のままの形状）を今日に示す貴重な資料としての紹介を行った。

残る二領、即ち今回本稿で取扱う桃山期の陣羽織二領は、多方面からの調査と考察が必要な資料と考えられるが、現況において完璧を期すには困難が必至である。一応、筆者の現段階の調査内容と考察を発表して、大方の見解を賜わりたく、次期において、より確実な方向への解決を得たいと考える次第である。

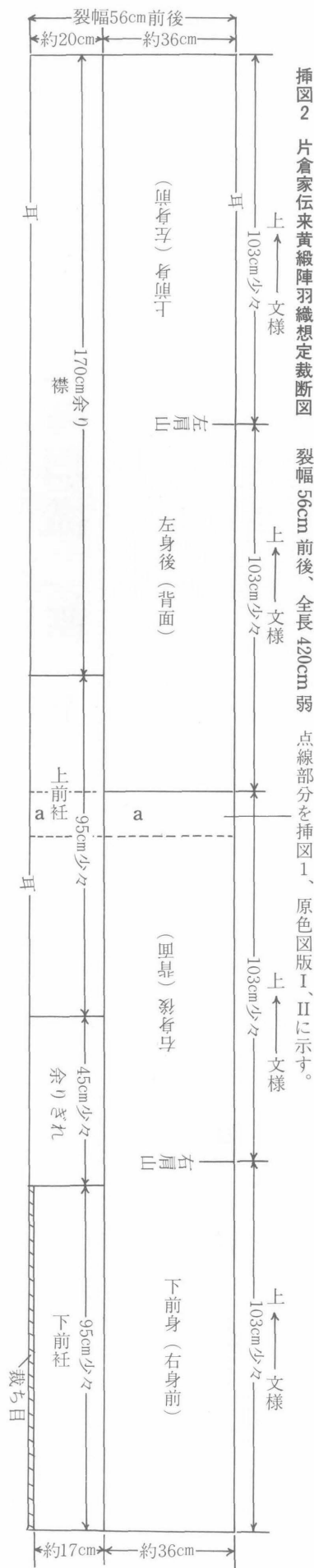
- 二 (1) 牡丹・蓮唐草文様黄緞陣羽織（図版Ⅰ～Ⅴ、挿図1～4、20）
伝来

片倉家の家伝では、先に美術研究三〇三号、三三二号の拙稿で取扱った小紋胴服と同様、「太閤様より拝領の御羽織」として伝来してきたものである。「片倉代々記巻之七」の重長の項（美術研究三〇三号拙稿一九二〇頁の註3、4照合）の中、「此年月日不知重綱註1伏見へ登り慶長四年迄滞留す、其間に太閤

挿図1 片倉家伝来黄緞陣羽織実測図 (寸法の単位はcm)
aの文字の向は、その部分のその文様の向を示す。



挿図2 片倉家伝来黄緞陣羽織想定裁断図



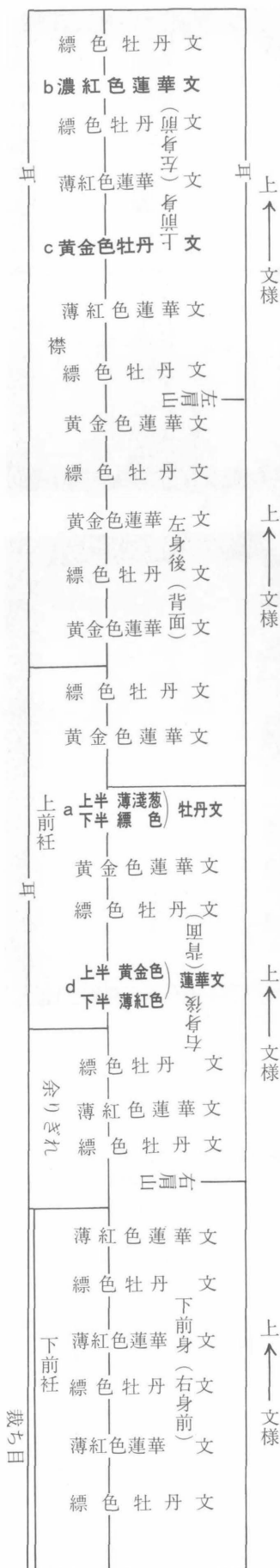
殿下秀吉公を拝し奉り御羽織を賜う年月日不知」とあり、別に羽織の数は記録されておらず、この黄緞製の陣羽織は、形状、裂地、仕立から考察して桃山期の資料として、先に発表し、昭和五三年六月に重要文化財に指定された片倉家伝来小紋胴服と同時代のものであることは明らかであるから、恐らく「秀吉公を拝し奉り、御羽織を賜ふ」の項に、小紋胴服と共に該当するものであるうと考えられる。わが国の衣服は、直線裁断であつ

て着装時以外は諸外国の衣服と異り、嵩張ることなく薄い状態に畳んで収納され、持ち運ばれるという衣料として極めて優れた便利さを持つ特色がある。従つて、人に与える場合も、同種、同系の衣類を二領、三領は畳み重ねて、恩賞として与えることは屢々あることであり、片倉代々記のこの「御羽織を賜う」の項は、故片倉信光氏が生前、調査に上った時の筆者にも「この黄緞胴服も小紋胴服と同様に『太閤様より拝領』として伝わっている」とおっしゃつておられ、昭和四六年(一九七一年)夏、片倉家蔵染織品撮影時に作成して下さった目録にも、その1頁に「三 黄ドン地胴服(太閤様より拝領)」と記述しておられる(註2の挿図)。

後述する調査事項と合わせ、右の伝来は信憑性が高いので、この黄緞陣羽織は、そういった意味でも得難い資料である。

形状・法量・仕立て方

陣羽織の形状・法量一覧表(伝 上杉謙信・片倉重長・徳川家康・徳川頼宣・伊達政宗所用)の伝片倉重長所用(1)牡丹・蓮唐草文様黄緞陣羽織の記入事項、及び図版I II III IV、挿図1の実測図照合、一見して明らかなのは、形態が極めて単純な矩形で



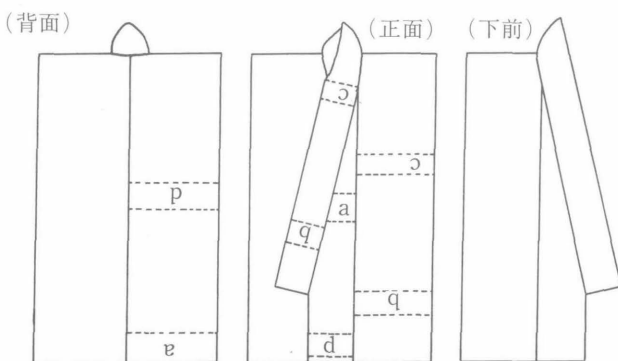
挿図4

片倉家伝来黄緞陣羽織裁断前想定文様配列図

裁断前の文様の方向はすべて同方向、牡丹と蓮華の横段が交互に組まれている。

挿図3 片倉家伝来黄緞陣羽織文様配置図

文様配列図(挿図4)と照合のこと。a, b, c, dの文字の向は、各所における文様の向を示す。



(背面) (正面) (下前)

も我が国特有の運針縫の特徴が明らかで、一ミリから二ミリの細かく揃った針目で、その縫糸は、黄味の多い濃紅染の、撚の強いZ撚絹糸が用い

られている。当初の縫目は何れも一度縫いと観察された。背縫の折被せは、われわれがいう正常な方向(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照、本稿の挿図1背面図の背縫線と襟附部分の「上」の文字のある側に折被せがある。)である。

上杉謙信所用と伝えられる八領の陣羽織のうち、(1)紙衣陣羽織と、(4)白雲文緞子陣羽織の二領が、片倉家伝来の黄緞陣羽織と形の上で同種である。上杉謙信所用の二領も、片倉家伝来のも、それぞれ、当時の小袖から、袖を除き、丈を多少短くした形態である。小袖形式の衣服で生じる前身頃と衽附、襟附の交わる接点、衽下り(筆者が、小袖や帷子、胴服、陣羽織等の形状を示す図や表では、その「衽下り」をアルファベットでは「d」で表示している)が、桃山時代の終りに近い頃から江戸初頭では寸法が短くなっているのだが、この片倉家伝来の黄緞陣羽織にも、その衽下りがやはり十センチ、下前十・五センチといった桃山期の終り頃から江戸初頭の衽下りの寸法の特徴が出ている。この稿で同種であると挙げた上杉謙信所用陣羽織の二領、(1)紙衣陣羽織は十二センチ、(4)白雲文緞子陣羽織は十三センチである。それぞれに、各伝来の時代を特色付けている衽下り寸法である。

12)と比較しても明らかであろう。仕立て方も、裏裂がないので、その方法、いわば純粹の和服仕立てであることが明瞭に示されている。縫い目

形態に、この陣羽織の形は自然に繫っている感がある。謙信所用陣羽織写真(挿図5、8、6、7、9、10、11、12)と比較しても明らかであろう。仕立て方も、裏裂がないので、その方法、いわば純粹の和服仕立てであることが明瞭に示されている。縫い目

あることである。この形は、わが国の衣服の一大特色である直線裁断が極めてよく現われている形態で、南蛮風俗、南蛮服飾の影響を受ける以前の、純粹国産形態といえる。南蛮服飾の影響や導入が僅小であつた上杉謙信の陣羽織八領の

形態に、この陣羽織の形は自然に繫っている感がある。謙信所用陣羽織写真(挿図5、8、6、7、9、10、11、12)と比較しても明らかであろう。仕立て方も、裏裂がないので、その方法、いわば純粹の和服仕立てであることが明瞭に示されている。縫い目

(寸法の単位はcm)

d 衿下り	e 立襟 (襟下)	f 衿幅	g 合襟幅	h 前身幅	i 衿	j 袖口	k 襟幅 (襟折り返側)	l 袖丈 袖アキ	m 身丈	重量	照合 挿図
12.0	18.0	19.5	19.0	39.5	—	—	11.0 (襟首囲りを外側)	56.0	135.0	600g	挿図 5
—	—	—	—	裾83.0 胸32.0	—	—	約 4.5 (繰入)	—	89.0	830g	挿図 6
—	28.0	—	—	29.0	61.0	—	襟 欠	51.5	118.0	560g	挿図 7
13.0	17.5	19.5	19.0	31.5	—	—	13.5 (内側)	63.0	114.0	530g	挿図 8
—	13.0	—	—	31.0	63.0	23.0	8.0 (立てたまま)	46.5	114.5	1820g	挿図 9
—	—	—	—	裾37.5 胸34.5	—	—	10.0 (立てたまま)	44.0	112.0	1730g	挿図 10
—	15.5	—	—	42.0	—	—	7.5 (立てたまま)	37.0	105.0	1680g	挿図 11
—	—	—	—	27.0	52.5	—	15.0 (内側)	45.0	86.0	400g 修理後重量	挿図 12
上前 10.0 下前 10.5	上前 24.5 下前 25.5	上前 15.5 下前 14.5	14.0	上前 24.5 下前 27.0	—	—	12.5 (内側)	40.0	100.5	400g	本稿 主題
—	—	—	—	28.5	—	—	8.8 (外側)	32.0	80.0 (背面)	500g	挿図 13
—	—	—	—	裾62.5 胸43.0	—	—	7.5 (外側又は立てた まま)	40.0	77.0 + 繰9.0	1150g	挿図 14
—	—	—	—	—	—	—	9.5 (外側又は立てた まま)	後 33.0 前 34.0	65.0	320g	挿図 15
—	—	—	—	裾35.5 胸24.0	—	—	9.0 (外側又は立てた まま)	前後共 43.0	82.0	95g	挿図 16
—	—	—	—	裾20.0 胸27.0	—	—	フリル襟跡 (立てて自然に垂 らす)	39.0	92.0	680g	挿図 17
—	—	—	—	裾29.0 胸22.0	64.0	25.5	13.0 (襟首囲りを外側)	49.0	92.5	1050g	挿図 18

挿図 5 — a

挿図 5 — b

挿図 5 伝上杉謙信所用
紙衣陣羽織 (表 1・上杉 2)
a — 正面
b — 背面
c — 実測図

挿図 6 — a

挿図 5 — c

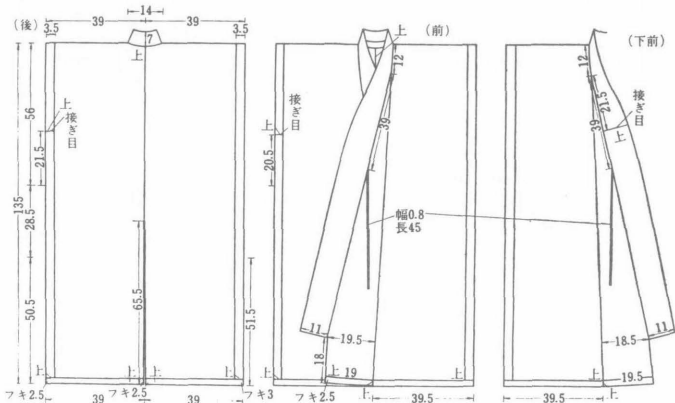
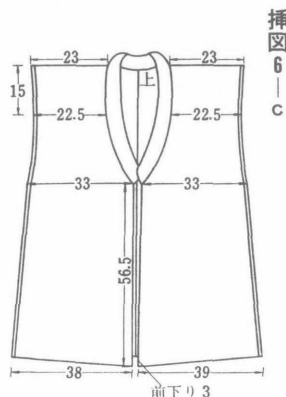
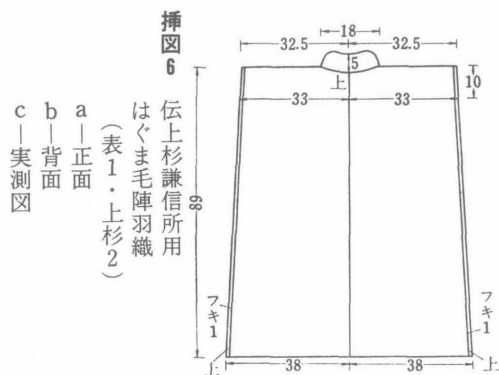


表1 伝 上杉謙信・片倉重長・徳川家康・徳川頼宣・伊達政宗所用陣羽織形状・法量一覧表

			衿	裾	{ 背割レ 裾脇アケ	中入綿	胸 紐	胸紐用の 乳、三角裂	{ 袖 袖の形	a 袖幅	b 後身幅	$\frac{b}{a}$	$\frac{c}{a}$ 襟肩ア キ×2		
伝 上 杉 謙 信 所 用 1550年 ～ 1600年 頃 (永 禄 ～ 慶 長 頃)	(1)	紙衣陣羽織 (裏・萌黄平絹)	有	ナシ	背割レ 65.5 裾脇アケ51.0	薄綿入	萌黄平打紐 0.8×45.0	穴	袖ナシ	—	39.0	—	14.0		
	(2)	はぐま毛陣羽織 (裏・紅平絹)	ナシ	ナシ	両脇全開	袷	ナ シ	—	袖ナシ	—	裾38.0 背33.0 肩32.5	—	18.0		
	(3)	緋雲文緞子陣羽織 (裏・萌黄平絹)	ナシ	ナシ	背割レ46.0	袷	不詳	不詳	広袖	24.0	37.0	1.54	15.0		
	(4)	白雲文緞子陣羽織 (裏・黄平絹)	有	ナシ	背割レ 49 裾脇アケ 50	袷	紅角ハツ打紐 55+10(フサ)	穴	袖ナシ	—	38.5	—	15.5		
	(5)	紺・緋羅紗袖替り陣 羽織 (裏・萌黄緞子)	ナシ	ナシ	背割レ 39	袷	欠	乳 (萌黄平絹)	小袖	24.5	38.5	1.57	15.0		
	(6)	緋羅紗陣羽織 (裏・黄緞子)	ナシ	ナシ	裾脇アケ 28	袷	黄四ツ打紐 (丸) 28.5+2(フ サ)	穴	袖ナシ	—	$(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 39.0	—	20.0		
	(7)	緋羅紗陣羽織 (裏・浅葱緞子)	ナシ	ナシ	裾脇アケ 35	袷	ナ シ	—	袖ナシ	—	$(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 42.0	—	11.0		
	(8)	白平絹雲竜文描陣羽 織 (裏・紅平絹)	ナシ	ナシ	ナ シ	綿入	赤角ハツ打紐 45+3.5(フ サ)	乳 (紅平絹)	広袖	20.5	32.0	1.56	15.0		
1600 年 ～ 1640 年 頃 (慶 長 ～ 寛 永 頃)	伝 片 倉 重 長 所 用	(1)	牡丹・蓮唐草文様黄 緞陣羽織 (裏・ナシ)	有	ナシ	ナ シ	單	ナ シ	—	袖ナシ	—	右身30.5 左身29.5	—	13.0	
		(2)	黒羅紗・繡取織木綿 縫い合わせ陣羽織 (裏・ナシ)	ナシ	ナシ	ナ シ	單	ナ シ	—	袖ナシ	—	$(\text{裾後幅} \times \frac{1}{2})$ 42.5 $(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 26.5	—	24.0	
	伝 徳 川 家 康 所 用	(1)	革陣羽織(裾に總 付、裏無晒麻・前身 は小葵文黄綾)	ナシ (衿分幅 アリ)	ナシ	ナ シ	袷	ナ シ	—	袖ナシ	—	$(\text{裾後幅} \times \frac{1}{2})$ 60.0 $(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 23.0	—	16.5	
		伝 徳 川 頼 宣 所 用	(2)	紅地金入繡珍桃文様 陣羽織 (表裏共裂の無双仕 立)	ナシ	ナシ	ナ シ	無双	ナ シ	—	袖ナシ	—	$(\text{裾後幅} \times \frac{1}{2})$ 42.0 $(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 21.0	—	21.0
			(3)	麻單陣羽織	ナシ	ナシ	ナ シ	單	ナ シ	—	袖ナシ	—	$(\text{裾後幅} \times \frac{1}{2})$ 36.5 $(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 24.0	—	23.0
	寛 永 頃	伝 伊 達 政 宗 所 用	(1)	黒羅紗地・裾緋羅紗 山形文様陣羽織	ナシ	ナシ	背割レ38.5	單	双突起形釦 かけ紐	直接縫付	袖ナシ	—	$(\text{裾後幅} \times \frac{1}{2})$ 43.0 $(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 21.5	—	15.0
(2)			紫羅背板地五色水玉 文様陣羽織 (裏・萌黄平絹)	ナシ	ナシ	ナ シ	袷	木の葉形 釦かけ紐	直接縫付	小袖	31.0	$(\text{裾後幅} \times \frac{1}{2})$ 40.0 $(\text{背肩幅} \times \frac{1}{2})$ 33.0	1.06	22.0	



挿
図
6
b

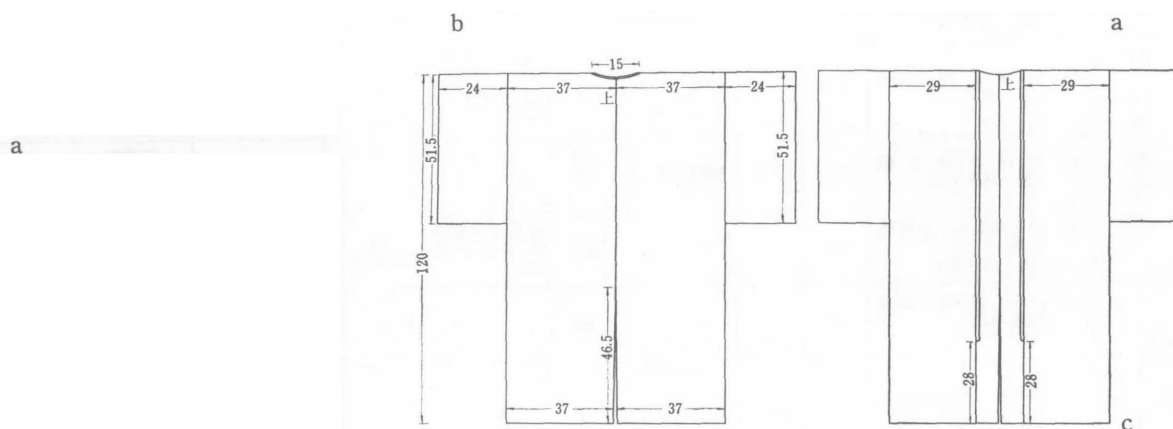
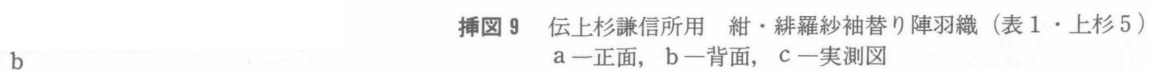
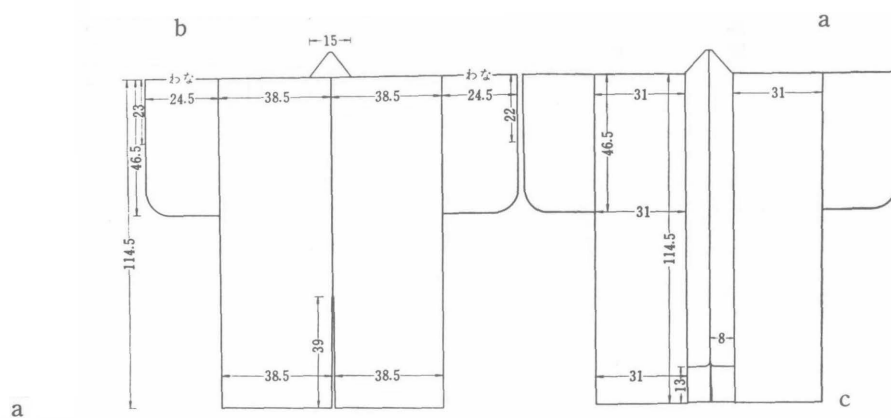


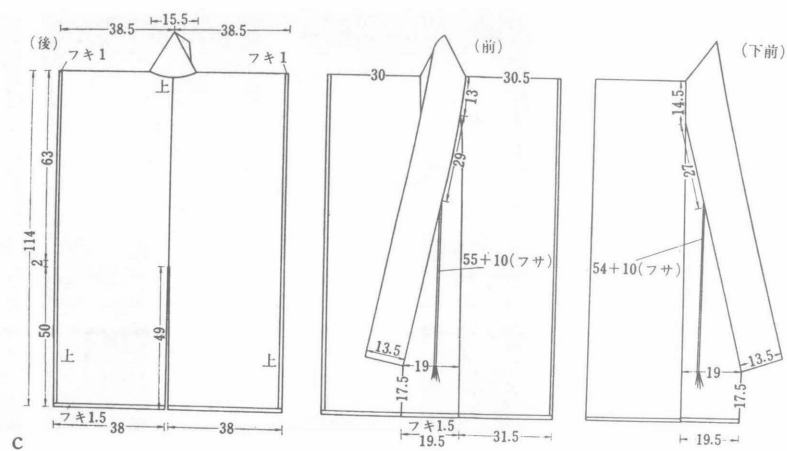
插图7 伝上杉謙信所用 緋雲文緞子陣羽織 (表1・上杉3)
a—正面, b—背面, c—実測図



挿図9 伝上杉謙信所用 紺・緋羅紗袖替り陣羽織(表1・上杉5)
a—正面, b—背面, c—実測図

挿図10 伝上杉謙信所用
緋羅紗陣羽織
(表1・上杉6)
a—正面, b—背面,
c—実測図

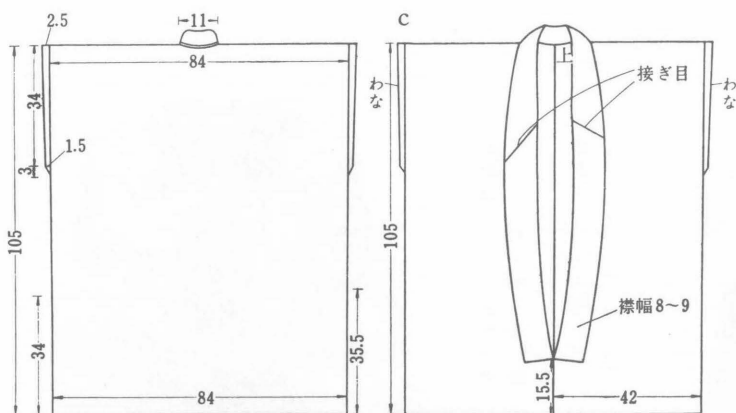




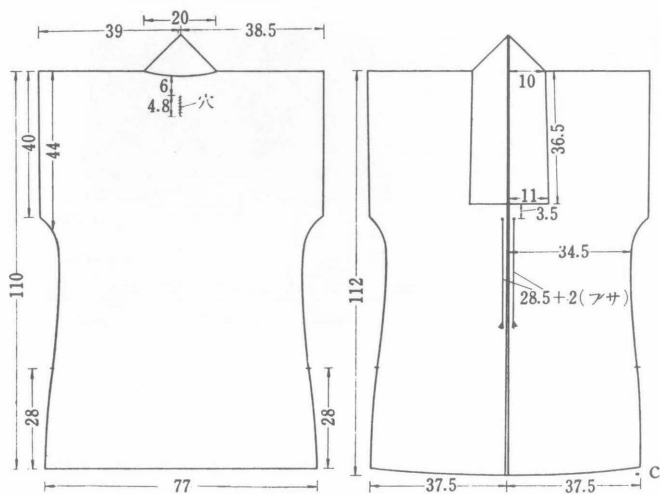
挿図8 伝上杉謙信所用 白雲文緞子陣羽織 (表1・上杉4)
a一正面, b一背面, c一実測図

b

a

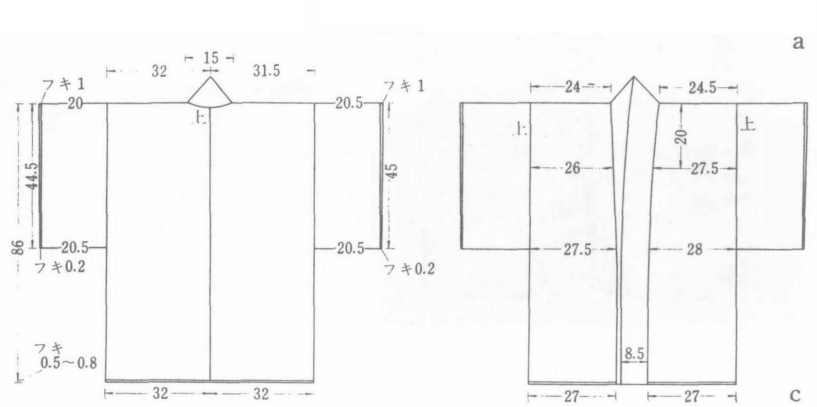


挿図11 伝上杉謙信所用 緋羅紗陣羽織 (表1・上杉7)
a一正面, b一背面, c一実測図



b

挿図12 伝上杉謙信所用
白平絹雲竜文描陣羽織
(表1・上杉8)
a—正面, b—背面,
c—実測図

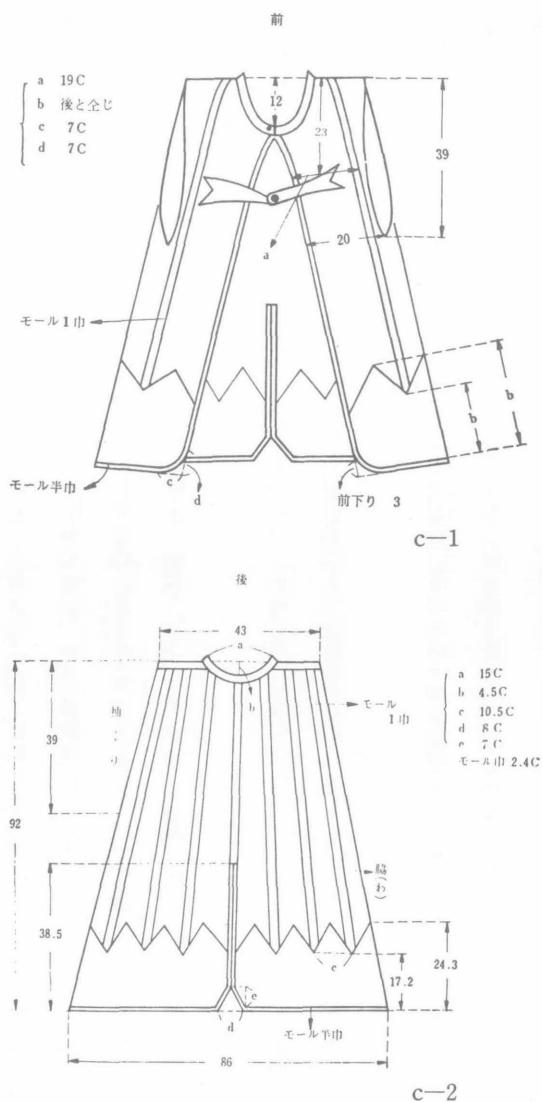


挿図14 伝徳川家康所用
革陣羽織(表1・徳川1)
正面

挿図13 伝片倉重長所用
黒羅紗・緋取織木綿縫合わせ陣羽織
(表1・片倉2)
a—正面, b—背面
挿図15 伝徳川頼宣所用
金入繡珍桃文様陣羽織(表1・徳川2)
正面

a

b



挿図 17

伊達政宗所用 黒羅紗地・裾緋羅紗山形文様陣羽織(表1・伊達1)
a―正面、b―背面、c―1・c―2 実測図の正面、背面

「註記」挿図17・18は故中村恭子氏が生前発表されたものからの転載で、この二領についての調査報告論文は、「聖和」六・七・八号に掲載されている。

a

b

挿図16 伝徳川頼宣所用
金入繻珍桃文様陣羽織
(表1・徳川3) 正面

挿図18 伝伊達政宗所用 紫羅背板地
五色水玉文様陣羽織
(表1・伊達2)

挿図1の実測図に見られる法量のように左右、上下の寸法は、相称である筈の個所も、一センチ前後は異なる場合が殆どで、室町から桃山、江戸前期頃までの大らかな仕立てがうかがわれる。仕立てられたこの陣羽織は単衣仕立であるため、どの縫目が耳で、どの縫目が裁ち目であるか一目瞭然、実物に当たっての形状・法量・仕立て方の調査は容易であった。

裂地の調査も裏裂がない単衣仕立であるため、これ以上の好条件はない。そういった意味でこの陣羽織は、当初の裂地・文様を知る上で最高の資料であった。

原色図版Ⅰ・Ⅱの解説を兼ねて

唯一、この色遣いがしてある牡丹の花の段部分（その花の上半が薄浅葱、下半が縹色、但し、背面右裾のその牡丹花は、右身頃の文様の向は前身頃が上向であるから、肩に縫目のない前身頃から後身頃に一続きの裂地である場合当然のこととして背面は文様が逆向となる。）を示した。裂の耳が何処にあるか、ほつれないように按排された裁ち目は何処にあるのか（裏裂のつけられる給仕立や綿入れ仕立てには、裁ち目の考慮は殆ど不要である。）、それらの説明は「註4」で行う。

図版Ⅰに見られる原色写真は、上前衿の「上半薄浅葱・下半縹色の上向牡丹花」が、中央や、上部に入っている部分である。挿図1の文様配列図で示してあるように、この裂地のほぼ中ほどにある。この裂地の中で唯一特異な色の組合わせの牡丹花があるところ、その裂幅内の別の部分（右側）は、図版Ⅱの、この陣羽織の背面、右下に、文様の向は逆向きで納っている（挿図1のa印刷合）。この部分の裏面は図版Vb、に示したようになっている。

「挿図3 片倉家伝来黄緞陣羽織文様配置図」と合わせ御覧願いたい。裁断前の黄緞裂が、どのように裁断され、仕立てられたかが判明したのである。

文様の向は、「挿図2 想定裁断図」と「挿図4 文様配列図」では、「上↑文様」で示した。

室町時代から桃山時代の初頭にかけての陣羽織には、上杉謙信所用の陣羽織八領を通しても見受けられるように、わが国の直線裁断の裁ち方と縫製が、あくまでもそれらの基準になっていることがうかがえる。例えば、舶来裂の羅紗や緞子を使っている陣羽織仕立には、その襟や、裾の角になる部分に控え目に丸みをつけたりする程度であった（挿図6、9、10、11）。それが、時代を経るに従い、南蛮船渡来による影響も大となり、南蛮屏風に屢々見られる風俗そのまゝ、陣羽織の形状にもその影響が派手やかに現われるようになったのである。ここに挙げた、筆者がこれまで直接詳しく調査した陣羽織の類の一覧表に、更に加えた陣羽織のその形状等、挿図写真と合わせて御覧いただきたい。先年、筆者が紀州東照宮で、徳川頼宣所用鎧櫃の中から発見した襷襦袢三枚などは、そのうち一枚は舶来品、他の二枚は我が国に於ての仕立てであった。この襷襦袢は三枚が一枚所から同時に出土したので、発見者の筆者は息も止まらぬばかりの驚きであった。それまでは世界中でわずかの二枚、当時のものが残るのみ（イギリスのビクトリア・アンド・アルバート博物館〔Victoria and Albert Museum〕と、スイスのバーゼル博物館〔Basel Museum〕に各一枚）であったのだから。

更に、その三枚の新発見の襷襦袢のうち、わが国仕立ての襷襦袢二枚（挿図19の襷襦袢二枚）中の一枚「白地雲文緞子襷襦袢」には、共裂仕立ての、合わせる襟首囲り寸法も見事に合致する組物鎧下着（挿図19の鎧下着）が共に伝えられていたのだった。こうなると、まこと奇跡の感さえある。昭和四九年（一九七四年）十月の現地調査での発見である。

これら、わが国に残る舶載裂仕立ての陣羽織、鎧下着類、襷襦袢（英語でラフ“ruff”、フランス語でフレーズ“frase”といわれ、上衣の別襟という小さくて軽い物品であることと消耗の著しい、それも身頃から離れた別襟であることから後世に残ることが先ずあり得ない代物なのである）三枚等、まことに稀有な新資料発見であった。

陣羽織の表に示した順は、厳密であるとは言いがたい点はあるが、形状や縫製、地質、文様等の諸観点から一応、古様が多く認められるものからの順にしたので了承願いたい。この表を通覧すると、時代が下るほどに直線裁ちに近い形が少くなり、曲線裁断が目にとまる傾向を感じさせるのだが、直線裁ちも結構見られるので一概に云々することはできない。紀州東照宮所蔵の家康所用と伝えられる革陣羽織(挿図14)や、同じく紀州東照宮所蔵の頼宣所用の紅地金入繡珍陣羽織(挿図15)、麻単陣羽織(挿図16)等、更に伊達政宗所用の山形文様羅紗陣羽織(挿図17)、紫羅背板地五色水玉文様陣羽織(挿図18)等、確かに曲線裁断の陣羽織が多い傾向であるが、この表の作成に当っては、それぞれの裁断法、形態、計測数値、裂地の材質・地質・文様等の資料調査の結果からの結論によったので、その結論が要するに伝来の正確性と結びついたというまでにはならない。

裂地・文様

挿図19 徳川頼宣少年時所用

襷襟二枚と鎧下着、白地雲文緞子の襷襟
と同文様の鎧下着は組になっている。

紀州東照宮蔵

黄緞は地組織の緯糸に木綿糸を用いた中国からの渡りものの錦で、わが国にも十四世紀には輸入されて珍重され、大切に取扱われていた。地組織の経糸は絹、それも撚が殆どない細い絹糸で、絵緯(文様を

織り出す役目の緯糸)には絹糸が用いられ、平金糸(紙に金箔を貼って、それを細く裁断し、糸状にしたものが金の平箔糸、銀箔を同様にしたものが銀の平箔糸で、金箔を使ったものを平金糸、銀箔を使ったものを平銀糸という。)や平銀糸も効果的に使われていた。

わが国所在の黄緞遺品資料で、筆者が知見のものについてはこの稿で一覧表にまとめて掲載した。各資料の所在・所蔵、概要、文丈(織文様の経の一かえり長さ)・窠間幅(織文様の横の一かえり幅)・糸込(経糸、緯糸それぞれの一センチ間の密度)・糸数(裂幅・重量・発表者及び発表誌名等を記し、写真、実測図が手もとにあるものは合わせて掲載したので、本稿の御検討に当たっても、是非御活用下さるよう願う次第である。

さて、片倉家伝来の黄緞陣羽織は、裏裂のない単衣仕立であるため、黄緞特有の裂地の性格である緯糸が太い木綿糸で二本引揃え、経糸は撚のない細い絹糸であるから、われわれのごく初歩的な物理的考察からしても、その経糸にかかる負擔は過重である。せめて裏裂のついた仕立であれば、その経糸の負擔は分散できるものを、この陣羽織の場合は、重力や摩擦を、その弱い経糸がもろに負わされているのであるから、摩擦の過大な襟部分の甚しい損傷は当然のこと、肩の損傷も致し方ないと思われる。その他には損傷がほとんど見られないし、色も褪色が極く少い——その絹の経糸は紅染で、裏面にはその紅染経糸の褪色は殆ど認められない——のである。木綿の緯糸も紅染で、裂地の裏面で見るとその緯糸にも紅の色が留っており、更にその太い木綿紅染糸に針の先を刺して糸の内部を覗くと、まことに鮮やかな紅色が観察された。紅染に関しては今回も、紅染研究者の鈴木孝男氏に御意見を伺った。

黄緞の遺品資料に関して、一覧表(表2)を見ても感じられるように、十四、五世紀頃からの渡りものとして、相当に貴重なものであったことが推測される。熊野

表 2 黄緞の現存資料一覧（諸調査・諸発表 昭和62年11月まとめ）

資料名称	及び	所在所蔵、年代	概	要	文丈、窠間幅、糸込（1cm間密度）	裂幅、重量	発表者名	発表誌等	挿図
(一) 熊野速玉大社古神宝類（国宝）に含まれる 朽葉色人物花唐草文様黄緞衾		14C～15C	(a)経に赤茶絹糸、緯に茶木綿糸を用い、黄・浅葱・萌黄の絹絵緯で模様を織り出した黄緞。明徳年間の調進とされる。 (b)濃い茶地に浅葱・黄・淡緑など落着いた色調で蓮唐草文と立女図を織り出す。地緯は木綿、五枚縹子組織。				(a)河上繁樹 (b)小笠原小枝	ミュージアム426号 日本の美術264号	挿図21
(二) 東博蔵（重文）千鳥蒔絵手箱内貼裂 丹地牡丹唐草鳳凰文黄緞		14C～15C	糸遣が通例とやや異なる五枚縹子組織で、緯四越を越さずに三越に止めている一種の重ね五枚縹子となっている。地緯は赤の絹と薄茶の二本合わせになっている。絵緯は赤・黄・薄緑・納戸の四色と銀箔で、箔を主体に絵緯二挺が切替となって、何れも全越に織入れられ、二分の一経の地揃で五枚綾に抑えられている（北村。佐々木信三郎氏も共に調査）。 経糸に撚のない生糸、緯糸には地糸に太い紅色の木綿と、絵緯にやはり太い撚のない黄、萌黄、深紅、縹色の絹と、平銀糸を用い、経五枚縹子地に牡丹唐草と鳳凰の文様が織られている（小笠原）。 その内張には赤地の牡丹唐草に尾長鳥文の錦が押されてある。鎌倉から室町時代にかけてこうした牡丹唐草文の錦や金襴の裂地が服飾や調度品にも用いられたが、これは鎌倉末か少くとも室町初期を下らぬもので、旧高野山天野社蔵の舞楽装束裂のあるものと通じて古様である（日野西）。	糸込は、1寸間に経300本（1cm間に100本強）、緯35越（1cm間に12越前後）位。			北村哲郎 小笠原小枝 日野西資孝	ミュージアム132号 中央公論社「日本の染織 四巻 舶載裂」 ミュージアム131号	挿図22
(三) 徳川美術館蔵（重文）長生殿蒔絵手箱内貼裂 唐花二重菱雷文繫黄緞		15C～16C	地緯は赤色の絹と、薄茶木綿の二本合わせで太く、経糸は赤色で細く、絵緯は黄、納戸を常二挺とし、それに茶、緑、白が飛杼で加えられている。花卉の部分は二分の一経の地揃となっているが、他は浮文となっている（北村。佐々木信三郎氏も共に調査）。	糸込は、1寸間に経300本（1cm間に100本強）、緯55越～60越（1cm間に18越～20越）位。			北村哲郎	ミュージアム132号	挿図23
(四) 大和文華館蔵 刺繡五髻文殊像の表具中廻し裂 唐花二重菱雷文繫黄緞（三の類裂）		15C～16C	(三)の黄緞と殆ど同じ組織、文様の類裂。(三)の内貼裂では唐花が六弁花であるのがこの中廻し裂は八弁花、蔓も大小の差以外はほぼ同じ。文丈・案間幅に相違あり。（北村。佐々木信三郎氏も共に調査）。				北村哲郎	ミュージアム132号	挿図23に近似
(五) 根津美術館蔵（重文）秋野蒔絵手箱内貼裂 赤地牡丹唐草豎縞文黄緞		16C	経は赤の絹で、地緯は薄茶の木綿とみられる。絵緯は緑、黄、納戸、銀箔で、箔はかなり太く、半越に織入れられ、地揃で抑えられている。花は黄と納戸の交替となっているが、納戸の部分は糸がほとんど抜けおちた状態。この黄緞は、前の二つ <筆者 註 この表の（二）（三～四も含む一）> にくらべると、糸遣いや箔の状況も、従来みかけるものに最も近く感じられる。	糸込は、1寸間に経350本（1cm間に120本弱）、緯22越（1cm間に7越強）位。			北村哲郎 神谷榮子	ミュージアム132号 本稿の註5	挿図24
(六) 茶地花豎縞文様黄緞 東博蔵 高野山天野社伝来舞楽装束綱裆		16C	天野社伝来の舞楽装束に用いられている黄緞で、経に緋色、絵緯に浅葱や黄の彩糸と銀糸を、地緯には二本引揃えの木綿糸が織り入れられている。				小笠原小枝	日本の美術264	挿図25
(1) 伝上杉謙信所用（重文）黒縹子萌黄金入黄緞袷装 (2) 同 上 裏裂		16C	上杉家伝来。講談社本写真図版No.129、裏裂つき、堅17.5cm、横40.5cmの五条袷装。萌黄の黄緞ひどく傷む。田相には目の詰まった奇麗な黒縹子。この黄緞は経糸が切れて、緯の木綿糸と金糸が筋になっている。経糸は茶色の絹糸（鉄媒染のため経糸は朽損）、緯糸は萌黄の木綿糸でS撚。 (2)裏裂。赤銀入黄緞で文様は不祥。経糸は赤の絹糸、緯糸は茶色の木綿糸でS撚。組織は、地は経の五枚縹子で文は平銀糸、地揃み。	糸込は、1cm間に、経60本前後、緯15越前後、金糸は7～8本入る。 糸込は、1cm間に、経60本前後、緯は20越前後。	25g 裂幅57cm前後	神谷榮子 同 上	講談社「上杉家伝来衣裳」 同 上	挿図26	
(3) 同 上（重文）濃茶平絹萌黄銀入黄緞袷装		16C	上杉家伝来 講談社本写真図版No.130、裏裂（金茶色平絹）つき、堅16.0cm、横52.0cmの五条袷装。田相は上質の濃茶平絹。萌黄金入黄緞が田相以外の四辺、条、紐等に用いてある。傷みは少ないが文様は不詳。経は萌黄の絹糸、緯は萌黄の木綿糸、組織は経の五枚縹子で、文は平銀糸、地揃み。	糸込は、1cm間に、経は60本前後、緯は15越前後で、銀糸は7本入る。	35g	同 上	同 上	挿図27	
(4) 同 上（重文）赤蓮牡丹唐草文銀入黄緞裂 （中央の裂） (5) 同 上（重文）同 上（両脇の裂）		16C 16C	上杉家伝来 講談社本写真図版No.247 用途不詳 堅166cm、横184cm 黄緞を三幅使用 中央の裂 ④赤蓮牡丹唐草文銀入黄緞裂 両脇の裂 ⑤赤銀入黄緞で、講談社本図版No.129の袷装の裏裂 <本表（2）> と酷似している。ただこの両脇の裂の方が多少密度が粗い。	④文丈は14cm前後、窠間幅は10.5cm前後。	中央の裂④の幅56cm弱 両側の裂⑤の幅57cm弱 370g	同 上	同 上	挿図28、29	
(6) 太閤より拝領 牡丹・蓮唐草文様黄緞陣羽織		16C	片倉家伝来 裏ぎれのない單仕立 後身丈 100.5cm、後身幅 { 右身 30.5cm 左身 29.5cm 襟肩アキ×2 13cm、前身幅 { 上前 24.5cm 下前 27.0cm 衤下り 右 10.5cm、左 10cm、衤幅 上前 15.5cm 下前 14.5cm 襟幅 12.5cm（襟は内側に折る） 合襖幅 14.0cm 袖アキ 40.0cm 文様構成上の主格は形も色遣いも牡丹、蓮華の段は副文。経糸は紅染の細い絹糸。地緯は紅染の木綿糸二本引揃え、絵緯は平銀糸（平金糸も少々あり）と、絹の絵緯で、それは縹と鶯色（牡丹の葉）が多く、黄金色に見える黄色、薄紅、濃紅、薄縹の順に少くなっている。蓮華文の段は蓮華は濃紅・薄紅・黄金色が使われているが、葉や蔓は平銀糸の輪郭線だけで表出されている。平銀糸の幅は0.8ミリ前後。縫糸は紅染Z撚（強撚）絹糸。	文丈 28.5cm～32.5cm 窠間幅 9.5cm弱 牡丹花 長径（ヨコ）8.5cm、短径（タテ）6.0cm 蓮華 ヨコ 7.5cm、タテ 7.5～8.0cm 地は経の五枚縹子、糸込は、1cm間に、経60本前後、緯は9越から10越。	400g 裂幅56cm前後 用布の總丈約420cm	神谷榮子	本誌美術研究341号	図版Ⅰ～Ⅴ 挿図1～4、20	
(7)（重文）紅地蜀江文黄緞狩衣		16C	山形県 黒川能上座 後身丈130cm、後身幅43.5cm、前身幅26.5cm（のぼり幅5.5cmを含む）。袖丈62cm、袖幅55cm（裂幅一幅を使用、端袖＋奥袖） 銀糸を交えた多彩な色糸で織り出されている。地組織は五枚縹子によらず、近世には、まず見かけない四枚縹子であることが注目される。またこの狩衣の裏地は永禄九年銘のある辻ヶ花染小袖と同種の辻ヶ花染肩裾が用いられていた。			裂幅56cm	河上繁樹 小笠原小枝	ミュージアム426号 日本の美術264（至文堂）	挿図30
(8)（重文）薄茶地黙花文黄緞狩衣		16C	岐阜県関市 後身丈142cm、前身丈136cm（後身、前身とも着装時の肩山からの計測は139cm）、衤79cm、身幅は、後身幅38cm、前身幅32cm（前身幅18.5＋のぼり幅 <衤幅> 13.5cm）、袖丈65cm、袖幅60cm（端袖18.5cm＋奥袖41.5cm）、襟幅（襟高さ）2.2cm、襟肩アキ×2 17cm、文様は銀箔糸（0.5ミリ弱幅）、1cm間に11本前後入る。赤味がかった青（紺）の濃淡①、②、緑（うす緑、緑、濃緑）③④⑤、黄（黄金色風）⑥、白（薄紅）⑦、地が茶（元は紅）⑧の八色。風情がある黄緞である。文様構成の糸は銀箔紙が入るので九色。	文丈は13cm～15cm、窠間幅は15cm、地は経の五枚縹子。糸込は1cm間に、経60本前後、緯13越前後。経糸は黄土色（紅の褪色）。緯は薄紅の太い木綿糸。	推測裂幅56cm前後、 560g強	神谷榮子	本誌 美術研究341号	図版Ⅵ Ⅶ 挿図31	
(9)（重文）紅地牡丹唐草文黄緞狩衣		16C	岐阜県根尾村 衤仕立、裏裂は紺地節絹、後身丈134cm、後身幅39cm、前身幅25.3cm（のぼり幅7.7cmを含む）、袖丈61.4cm、袖幅55.4cm（端袖43cm＋奥袖12.4cm）、襟幅2.8cm～4cm、襟回69cm	文丈は15cm前後、窠間幅は11cm前後、牡丹の花の経径4.5cm前後、横径3.5cm前後の縦長の花、経に細い紅絹糸、緯に紅木綿糸を用いた経五枚縹子組織（密度は、1cm間に経70本前後、緯は18～20越）で平銀糸を半越、地絡みに入れて文様表出。			河上繁樹	ミュージアム426号	
(10) 薄茶地蓮唐草文黄緞狩衣		16C	奈良県 天川神社伝来 袖丈68cm、袖幅68cm（端袖＋奥袖）、後身丈129cm、後身幅41.3cm			裂幅56cm	河上繁樹	ミュージアム426号	

挿図23 (三) 唐花二重菱雷文繫黄綴
(重文 長生殿蒔絵手箱内貼裂)

挿図24 (五) (重文) 秋野蒔絵手箱内貼裂
赤地牡丹唐草縦縞文様黄綴 註5

挿図21

(一)熊野速玉大社
古神宝類 (国宝)
に含まれる、
朽葉色人物花
唐草文様黄綴
14c~15c

挿図22

(二) (重文) 千鳥
蒔絵手箱内貼裂
丹地牡丹唐草鳳
凰文黄綴裂

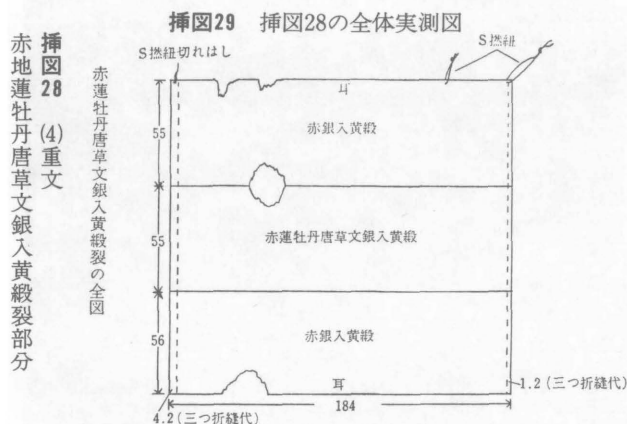
a→
b↘

挿
図
25

高野山天野社伝来の舞楽装束補裆に
使用の茶地縦縞黄綴

挿図27 (3)重文 伝上杉謙信所用
濃茶平絹萌黄銀入黄綴袈裟

挿図26 (1)重文 伝上杉謙信所用黒繻子萌黄金入黄綴袈裟



挿図31 重文 薄茶地獸花文黄綴狩衣
岐阜 関 春日神社

徳川美術館の(重文)長生殿蒔絵
手箱の内貼裂の「唐花二重菱雷文
繫黄綴」(表2の(三)、写真は挿図23)、
大和文華館の「刺繍五髻文殊像の
表具中廻し裂」の「唐花二重菱雷文
繫黄綴」(表2の(四)、徳川美術館
のと、大和文華館のこの二種は似
通った黄綴で、双方とも十五世紀

挿図30 重文 紅地蜀江文黄綴狩衣

山形 黒川能 上座

速玉大社の国宝である古神宝類に
含まれている「朽葉色人物花唐草
文様黄綴衾」(表2の(一)、写真は挿図
21)は、明徳年間(1390-1393)の調進
で、一四世紀末のもの、緯糸に濃い
茶色の太い木綿糸を用い、経糸は
赤茶色絹糸、絵緯(文様を構成する
緯糸)に黄、浅葱、萌黄の絹糸で蓮
唐草と立女を織り出したもの。

東京国立博物館の(重文)千鳥蒔
絵手箱の内貼裂「丹地牡丹唐草鳳
凰文黄綴」(表2の(二)、写真は挿図
22)は、故佐々木信三郎氏と北村哲
郎氏が、かつて詳しく調査された
十四世紀末から十五世紀始めのも
の。

末から十六世紀始めごろの作品。

根津美術館の(重文)秋野時絵手箱の内貼裂「赤地牡丹唐草竪縞文黄緞」は十六世紀の黄緞裂で、筆者がこれまで調査で屢々経験した十六世紀の銀欄等に見る意匠である。一覧表のその項と挿図24と註5を照合されたい。

黄緞の一覧表で、その番号に算用数字を附したグループは、前述、漢数字を附したグループより時代的に幾分新しく、十六世紀に入ってからのものである。中国で出来た金欄、銀欄、緞子、錦、刻糸、刺繍等がわが国に舶載され、それも中世の頃とは格段の差の量と見られる。そうした中国からの染織品が、かなりの量輸入されている状況は、今に伝えられている遺品資料の上からも想像はつく。それらの中で黄緞は、遺品資料は少ないが、その理由は、緯糸が木綿の太い糸であるところへ、経糸はまた、何とも理の合わぬ燃のか、らぬ細い絹糸であるため、衣料として使用することは、通常の役には立たぬこと必條である。美麗な絹の絵緯で文様を織り現わしても、飾りものならともかく、裂自体に摩擦や引力が相当加わる着るものとしては寿命はごくごく短い筈である。

こうした黄緞の性格を知った上で、今、片倉家に伝わった黄緞の陣羽織を見ると、裏もなしで、よくも四百年近く無事で伝えられたと思わざるを得ない。

ところで、片倉家伝来のこの黄緞陣羽織と殆ど時代を同じくする、即ち十六世紀に中国で生産、わが国に輸入されたと考えられる黄緞を、一覧表の順を追って、解説、考察を試みることにする。

(1)伝上杉謙信所用の(重文)「黒縹子萌黄金入黄緞袷装」(挿図26)、(2)同裏裂の「赤銀入黄緞」、(3)同じく上杉謙信所用(重文)「濃茶平絹萌黄銀入黄緞袷装」(挿図27)、(4)同じく上杉謙信所用(重文)「赤連牡丹唐草文銀入黄緞裂——中央の裂——」と、(5)同じく両脇の裂——と、この大きな風呂敷のような形をしていて、更に、乳のような紐がつけてある黄緞三幅縫い合わせのもの(挿図29)。

この(1)から(5)までの上杉謙信所用と伝えられる袷装や三幅縫い合わせの黄緞は、文様が金欄・銀欄のように、平金糸や平銀糸で表わされていて、絹の色糸で文様を表現する錦や緞子の系統の文様表現ではない。金欄・銀欄系の黄緞と称すべきものであろう。

上杉家には謙信所用と伝えられる小形の袷装が八領あり、金欄、銀欄、黄緞、緞子、縹子が、田相部やその他に適宜使用されており、その中にあるのは、黄緞は文様もそれらの金欄、銀欄と同系で、地緯が太い木綿糸であることを確認しない限り、金欄か銀欄と見紛う。^{註6}

(7)(重文)「紅地蜀江文黄緞狩衣」(挿図30)は、山形県の黒川能上座に伝えられた能装束で、この狩衣の裏裂には、永禄九年銘のある辻ヶ花染小袖と同種の辻ヶ花染肩裾が用いられていて注目された。

(8)(重文)「薄茶地獣花文黄緞狩衣」(図版VI、VII)は、岐阜県、関市の春日神社に伝えられた能装束で、図版で見られるように、文丈は十三センチから十五センチ、窠間幅は十五センチ。その窠間幅の間に二列の竪縞織文様が入っている。但し文様の向は霊芝文も花文も、横縞文様として納まる形の文様になっているのであるから、それが竪縞として裂地に納まると、九十度方向を変えて横向となっている。そのように仔細に見ると不自然な文様であるが、一見、不自然さを感じさせないのはこの文様が竪縞文様としても優れた出来であるからなのであろう。

窠間幅、すなわち裂地の幅の中で、くり返される文様一単位の幅が、この裂では竪縞二筋が一つの単位となって繰り返かえされている。その二筋の文様は色遣いも、文様の形も似ているので観察を急くと見間違える。注意深く竪縞文様三筋の内容を検討し、三筋が一組になって構成されているその二列の竪縞文様であることを確認する。向って右側の列が、明瞭な霊芝雲の方は中央の列が牡丹と蓮華の列、その左の列は見返えりの頭部と前方向頭部の四つ脚動物が交互に入っている。そういった組

合わせの、その左の縦縞は、文様を構成する絵緯の色や、銀箔糸が双方の縦縞に同様な調子で入っているので一見、文様の形状が異なることに気付かない。

即ち、先に説明した縞の左側の縞は、向って右側の雲芝雲が、先の縞の間、間に、即ち互の目の位置に入っており、その形も凹形雲芝雲文で、凹の部分に、その部分の絵緯糸の色の粒文様が入っている。花文の列も梅鉢形の花文と花卉が少々垂れた蓮華らしい形のもが並び、その左の動物の列は、これは流動感の溢れた締った感じの雲龍文らしいものが観察され、文様それ自体楽しい内容である。

損傷も殆どなく、褪色も先ず感じられるものはない。一覽表の(8)の欄に示したように、この黄緞狩衣は保存がよく当初の形状を今日によく傳えている得難い好條件のほかに、文様の形状、文様素材の組合わせ、表現、色遣い(一覽表に挙げておいたが経糸は絹の紅染糸が褪色して黄土色、地緯糸は薄紅の太い木綿糸、この地緯の木綿糸は紅の色が糸の内側には比較的よく残っている。文様構成の絵緯には赤味がかった青―紺―の濃淡二色に、緑は薄緑、緑、濃緑―黒に近く見える―の三色、黄は黄金色風で、ほんのり薄紅が残っている現状は殆ど白色の、総計八色、それに、文様構成に銀箔糸が加っているので総計九色である。)、紅の色は褪色しても格調の高い透明感のある茶色や薄黄色になるので一見して、品格のある調子を出すので不思議でさえある。推測裂幅は、

裏が観察できないので推測で五六センチ前後と見る。この黄緞狩衣の重量は五六〇グラム強で比較的軽い。

(9) (重文) 「紅地牡丹唐草文黄緞狩衣」

(10) 「薄茶地連唐草文黄緞狩衣」

右の二領については、筆者は直接調査に当たっておらず、ミュージアム426号に発表された河上繁樹氏の調査事項を、この稿の一覽表に掲載した。了承いただきたい。

以上、片倉家伝来黄緞陣羽織の調査報告を行うに当り、先ずその陣羽織に就いての伝来を述べ、次に、形状・法量・仕立て方に就いて調査して、その調査内容を記し、比較対照となる陣羽織の物件についての調査内容を、既に発表された諸物件の諸氏のもの、筆者のもの等、写真・実測図・一覽表と共に併わせ呈示した。

ここで、筆者の行った片倉家伝来黄緞陣羽織の裂地・文様の調査内容が、この場合は、さいわいこの陣羽織は、裏裂を使用しない単衣仕立てであることから、使用黄緞裂を裏面からも観察でき、そのために、裏裂付きの衿仕立てや綿入仕立てでは不詳、乃至は推測の域に止ることが、今回のこの陣羽織

では明瞭になった。

それら判明した諸事項により、現状の黄緞陣羽織を通して、当初のこの陣羽織

挿図 20 片倉家伝来黄緞陣羽織裏面 上から背面、正面(上前)、正面(下前)の全容 図版Ⅱ・Ⅲ、挿図1、4 照合

を想定し、裁断以前の裂地の形状を推測し得、裁断は如何に行われたかも判明したので、次にその報告を行う。

図版五の a、b で見られるように、この黄緞陣羽織は、裂地の裏側を見ると、文様が極めて鮮明である。この裂地の場合、表側では銀箔糸(金箔糸も多少、混って入っていて、全面を当って調査している時に、ルーペを通して見る箔糸が、これは金箔糸だと認められる個所が処々にある。特に金箔糸の輝きが多い個所は、図版Ⅱの背面の左背、縹色牡丹花の段の中央の花あたりと、図版Ⅰの上前の襟で、黄金色牡丹花―牡丹の列ではこの黄金色は唯一が斜め上方に接している縹色牡丹花の部分の二ヶ所である。)が、文様の輪郭線をあらわす役割を負っており、裂地の裏面では輪郭線以外のところを、銀箔糸の裏面―紙の面―が渡って埋め尽くしているので、文様の輪郭線が隔然と示されているのである。その他の部分は、平箔糸の箔の附いている面が、裂地の地組織裏に接し、平箔糸の紙の面が裂地の裏側を組織に従って輪郭線を残して埋めつくしているのであって、そういった様相が見られる裏面であるので、染色、織糸、組織、文様の形等が実に明確に示されており、色緯糸の状態も判明すること屢々で、この裏面からの観察は、引き込まれるように興深く行われた。

この黄緞裂の文様は、牡丹文も蓮華文も一貫して同方向を向いて織られており、牡丹文と蓮華文が交互に段構成で織り進められている。文様としては、牡丹の段が主で、蓮華文の段が副である。文丈は、二九センチ前後の個所が多く、最長は三一センチを少々越える。窠間幅は九・三センチである。

牡丹文の段と蓮華文の段が組になって一単位となり、即ち、文丈となって繰り返えし織られている。牡丹と蓮華と二つの段が組まれて一模様となっている中で、牡丹の段は、花にも葉にも輪郭線の銀箔糸に加えて、絵緯の色糸

が加わって文様表現が行われている。蓮華の段は、花は輪郭線の銀箔糸と絵緯の色糸が入っているが、その葉と蔓草には色糸は入らず、地組織の紅地の上に銀箔糸の輪郭線だけである。更に牡丹の段は広く、蓮華の段は狭い。このことは精査にかゝるまでは文様上のなだらかな起伏と思うぐらいであったのだが、精査の段階で始めて気付き、連続文様の中における大小、強、弱を形と色遣いでさりげなく、見事にやってのけているのを知り、改めて感じ入ったのであった。

さて、この黄緞陣羽織の文様配列を、仕立てる以前のこの黄緞用布に置く試考が成功したので「挿図4」を御覧いただきたい。また、この図を、先に挙げた「挿図2 想定裁断図」と照合されたい。そして更に「挿図3 片倉家伝来黄緞陣羽織文様配置図」と合わせ御覧願いたい。一続き一枚の牡丹蓮華唐草文様黄緞裂が、どのように裁断され、仕立てられたか、判明したのである。

文様の向は、「挿図2 想定裁断図」と「挿図4 文様配列図」では「上↑文様」と、その上向の方向を示した。

また、挿図4の「文様配列図」と挿図3の「文様配置図」を照合し、裁断前のどの部分が、仕立て上った陣羽織のどの部分に、文様が上向になっているか、下向になっているか、図版の写真とも照合して御覧いただきたい。

「挿図4 片倉家伝来黄緞陣羽織文様配列図」と「挿図3 片倉家伝来黄緞陣羽織文様配置図」の照合説明をすると、挿図の配列図において文様の段は二七段あることが判った。そのうち、文様及び色遣いが同種の段に分けると、七種類に分けられ、挿図4の「配列図」の上方から種類別に、二七段中、同種の文様段が幾段あるか数えると、縹色牡丹文の段が十二段、濃紅色蓮華文が一段、薄紅色蓮華文が六段、黄金色牡丹文が一段、黄金色蓮華文が五段、

上半薄浅葱・下半縹色牡丹文が一段、上半黄金色蓮華文・下半薄紅色蓮華文が一段という次第であった。

そのうち一段のみというのが次の四種であるが、その中の一種は、先に挿図1の「片倉家伝来黄緞陣羽織実測図」中において「a」の記号を附して説明した。他の三種を「b」「c」「d」とし、「挿図3」において、その一段のみ存するという文様色遣い部分の所在を示した。その図におけるアルファベット文字の向が、使用されている場の、その裂地の上下の向を示すものであること前述した通りである。

次に少い数の段となると、(二段、三段、四段はなく)黄金色蓮華文の五段、次が薄紅色蓮華文の六段、(七段から十一段はなく)最多段の十二段である縹色牡丹文である。

この、まことに伸びやかな自由な発想の色遣いが、この文様におかれていることを筆者は、今回の精査を行うまで全く気付かなかった。この精査を進める途次、驚きが一つ一つ増して、今では、この意匠に当った人物が、少くとも、前以って精細な計算の上で行った色遣いとは思われず、裂地の糸の、意匠の、地質の、そして莫然と想い描いたであろうその用途を、半ば信じての製作であったと想定するようになった。

十六世紀後半の明の製織であろうと想われる。約五六センチの幅、丈は四メートル二〇センチ前後のその裂を、小袖から袖を除いた、丈は小袖より二〇センチ前後短くした陣羽織か胴服が用途の衣料としてわが国の桃山期に仕立てられたものである。後補は全くない。

黄緞の裂地としても多色の色糸が用いてあり、銀糸、金糸(少々)がこの文様のすべての輪郭線に、地は紅染の太い木綿緯糸二本引揃えに、撚が殆どない細い絹の紅染経糸での五枚縹子地、絵緯は、縹色(牡丹花に多)と鶯色(牡

丹の葉茎に多)が多く使用されており、黄金色に見える黄色、薄紅、濃紅、薄縹の九色である。

織り上げた当初の、この黄緞は如何に品よく華麗であったことであろう。九色を、品よく取扱って織り成した牡丹と蓮華の組み合わせ文様、牡丹を主に、蓮華を副にと調和をとらせ乍ら、見るものに、主と副の別を感じさせず、程よく快い波調を覚えさせる。それぞれの占めるスペースの面積でも、取扱いの強弱の調子でもない。色遣いを多数な中から効果的に選び用いてあるのだろうか。この黄緞裂は、わが国に渡って来て、この形の陣羽織に仕立てられたので、われわれはこの形でしかその効果を知らない。図版Iの正面部分の箇所は、やはり、この裂地の効果を最もよくあらわしているところだと思う。肩山や袖山に縫目のない、前身頃と後身頃が一続きの裂として仕立てられるわが国独特の裁断法では、文様のパターンに上下のある一続きの裂から、接ぎ目なしに後から前へ、前から後へと裂地を裁断するなら、前後のどちらかに文様が下向になる側が出ることは必條である。そういった意味でも、絵羽模様でなく、一方向連続文様の一つづきの長尺から、わが国独特の、肩に縫目のない衣服を仕立て上げるとなると、この陣羽織は最高によく出来ていると賞讃できるのではないだろうか。

尚、清朝の裂地であるが、牡丹と蓮華を組ませた連続文様で、文様の大きさも牡丹も蓮華も、この片倉家伝来の黄緞陣羽織と似通った裂地を紹介する(註7の挿図)。

それは、北海道神宮旧蔵の「満州古衣」と称されるもので、筆者は北海道開拓記念館で昭和五九年(一九八四年)九月一日(土)から十一月三〇日(金)まで開催された「第25回特別展アイヌの装い―文様と色彩の世界―」の折、会場でケース越しに拝見して注目し、会期後の特別観覧を願い出、概略調査を

行った。

更に昭和六一年七月一二日(土)、北海道大学の東洋史料出身で、現在札幌稻西高校の社会科学教諭中村和之氏(山丹交易と蝦夷錦に関する研究をここ数年続けておられる)と、前回と同様、北海道開拓記念館で、再度の調査をさせていただいた。

この「満州古衣」と称する衣料は、何時ごろこの服の形に仕立てられたか不詳だが、北海道神宮(以前は札幌神社であった。その札幌神社に随分以前からこの「満州古衣」はあったそうである。)に納められた時点では既にこの形をしており、損傷もこの写真に見られるのときとして変らなかつたそうである。中村和之氏と共同調査をした折の写真とその時のノートにあった数値等をここに附す(註7)。写真(註7の写真a・b)に見られるように、その衣服の背面裂地の文様には片倉家伝来黄緞陣羽織の織文様と共通する形状や雰囲気を感じる。ただし片倉家の黄緞陣羽織の文様が、牡丹も蓮華もすべて同方向であるのに対し、この山丹服の緞子は、牡丹の列と蓮華の列とはその向を逆にして連続させてある。即ち連続文様の多くの例に採り入れられている「上下のないう文様」の配慮が行われている。

この清朝製の「牡丹蓮華唐草文様緞子」は片倉家伝来の黄緞陣羽織の裂地にくらべて、文様の便化がいささか生というか幼いというのか、それに文様自体にも生彩を欠く。格調高い伸びやかさと展開を見せる片倉家伝来の牡丹蓮華唐草文様黄緞に、文様の素材も大きさも殆ど変らない^{註7}というのに。年代の差だけでなく、生産地その他の問題が加わっているのであろうか。

(一九八八年一月)

註

1 片倉重長は、始め「重綱」と名付けられたが、後に、公方家綱公の御諱字を避け

片倉家伝来陣羽織二領 上

て、「重長」となった。片倉代々記巻之七重長の項——美術研究三〇三号拙稿、一九頁下段より二〇頁上段初行——照合。

2 片倉家伝来染織品目録は、昭和四十六年七月に片倉家十五代信光氏が作成、七月十八日に速達で筆者宛発送されたもの、目録内容は便箋八枚に互り、註2の挿図はその第一枚目。

3 昭和六十二年六月九日(火)、片倉家伝来の「黄緞陣羽織」並びに、同じく「黒羅紗・繡取織木綿縫合わせ陣羽織」の調査に仙台市博物館に向いていた筆者のところに、米沢在住の紅花研究家鈴木孝男氏が、筆者からの依頼もあって、それら二領の陣羽織に使用されている紅花染の確認にいらして下さった。その折の鈴木孝男氏の確認と所見。鈴木孝男氏には、米沢の上杉神社で筆者が「上杉家伝来、謙信・景勝所用服飾類」の調査以来、紅染と想われるものの確認をしていた⁴いており、筆者が「紀州東照宮の服飾類」を発見、調査の折も、三度、米沢から和歌山まで出向いて下さり、御確認、御教示等御力添えを賜った。

4 ☆「挿図2」は、この陣羽織の用布を如何に裁断したかの説明図で、裂地の文様の向を決めた上で、実測調査の結果を似て、裂幅を割出し用布の全長を測定し、二七段の文様の種類と色遣いの調査から、その配列図(挿図4)を作成した。五五・五六センチ幅のこの黄緞裂を四メートル二〇センチは使用して、⁵「挿図2」の想定裁断図と「挿図4」の文様配列図とを、実測法量で似て作成した。二七段の文様配列もすべて各部分違わず合致した。幅二〇センチ、長さ四五センチの「余りぎれ」も、どの部分の如何なる文様であるか、残念乍らその余りぎれだけは現在では確認出来ないが、間違いなく、その部分の文様のその大きさの裂が当初はあった筈である。

註2の挿図 昭和46年7月
上旬に作成完の片倉信光氏
直筆 同家伝来染織品等目録初頁

註1の挿図 片倉代々記
宮城 片倉輝氏蔵

☆縫製は、紅染のZ撚強撚絹糸で、平縫

(ぐし縫)は一ミリから二ミリのこまかい針目の一度縫いである。脇縫等縫い合わせの箇所は、同じく紅染のZ燃強燃絹糸で、一ミリから二ミリのこまかい針目の一度縫い、縫代を前身と後身に割って、縫代の端から五ミリばかり入った位置を裏面の長さが二センチ前後の大針目で押さえ縫いで固定してある。脇の延長線に袖あきがあるが、その袖あき部分の裏の始末は脇縫の続きで、同じ紅染強燃絹糸で、縫代の端から五ミリばかり入った位置を裏面の長さが二センチ前後の大針目で押さえ縫いである。

☆襟付縫は、襟は黄緞の耳の側が襟付の縫い合わせ側に用いてある。それは、身頃や衤付の縫い合わせ部分を更に襟裂を重ね合わせ縫ったりするので、この厚手の黄緞裂を重ね合わせ縫うことは最小限に止めなければならない。頑丈に、しかし可能な限り縫い合わせ部分の厚くなるのを避ける。そのような方法が考じられている様子が縫製面からうかがえ、そのためすっきりした仕立が出来ている。

☆上前衤は、文様の色の組合わせがその部分一ヶ所しかないa(上半 薄浅葱・下半 縹色牡丹文)と、d(上半 黄金色・下半 薄紅色蓮華文)の二ヶ所を持つ裂で、その二ヶ所が、上前衤のほどよい位置に、上向の美しい姿で入っている(図版I参照)。☆下前衤は、裁断の折に、織耳の部分を持ち落して(挿図2)あり、その衤裂をそのまゝ、右に移して、下前衤として、下前身頃(右前身頃)の前あきの耳(以下「織耳」を「耳」という)に、耳を裁ち落した側を縫い合わせて下前衤を作成している。この衤裂の耳を裁ち目にし、下前身頃の耳と縫い合わせた意味は、耳と耳の縫い合わせ線が、胴服の正面で垂らす形になると引き吊りを生じさせる結果を来す恐れがあるので、片方を裁ち目にする事によってその防止が考えられる故かと想われる。☆また、立襟や裾、襟の裁ち目を、撚りぐけのように細くしてくけつけてあるのは、比較的厚手の裂地を単仕立にする時、そのくけ代が、部厚であると、引きつりを生じさせる結果を来すので、それを防止するために撚りぐけの方法が用いられている。

5 文様がこの黄緞と同じ「花鳥文縹縹」の金・銀欄は、わが国処々に残されており、筆者が調査した上杉謙信所用と伝えられる(重文)「金・銀欄緞子等縫い合わせ胴服」に用いられている中にも、この同文「青緑色花鳥文縹縹銀欄」が用いられており、同じく(重文)伝謙信所用の袷姿にも、この同文の色違い「萌黄色花鳥文縹縹金欄」があり(この二種は何れも講談社昭和四四年四月発行の拙著「上杉家伝来衣裳」の図版54・132で原色写真で掲載)、また、岐阜県関市の春日神社に伝来する(重文)の能装束の狩衣と側次に、この裂の色違いを用いたものが四領ある。それには珍しく裂地の文様の処々、裂幅一ぱいに約一センチ幅に細く区切りが入り、そこに「哀思誠」あるいは「陸小惠」の文字が白糸の浮織で織り出してある(講談社本解説16頁

に挿図所載)。この文字が何を意味するかは明確には判らないが、恐らくそれらの裂の製織に当たった明の機戸が織手の名称を意味するものであろう。加賀の前田家に伝わる前田利家所用といわれる脚絆にも同裂があると聞き、天野社伝来の舞樂装束にも同文の裂の装束があり、わが国に輸入されただけでもかくの如くであるから、この内貼裂の黄緞裂は、その文様が金・銀欄用になって明の或機戸で、今日という量産がなされたことが知られる。

6 黄緞には、錦のように、絵緯に二種類以上の複数の色糸(金箔糸や銀箔糸もその数に入れて)を用いて文様を表出しているものと、金欄や銀欄のように、金箔糸や銀箔紙一色で文様を表出しているものとの二種類がある。現存遺品資料から推測して、この一覽表でも考察されるように、前者の錦系の黄緞は、黄緞としての製作年代が古い明代の初期から中期にかけてのものに多いと想われ、金・銀欄系の黄緞は、明代の中頃から後期にかけて多いようである。

7 北海道神宮旧蔵「満州古衣」 薄茶地牡丹蓮華唐草文様緞子(背面に、横ぎれで使用)のメモ

文丈三二センチ前後、窠間幅一七センチ前後

一センチ間の密度 経糸 一〇〇本前後、緯糸 三五〜三七越前後

(1) 文様

(牡丹) 長径一〇センチ前後、短径九センチ前後

(蓮華) 横 一一・五センチ、径 九・五センチ

(色糸) 薄黄(黄味がかった)、平金糸、薄黄土色、紫カ、浅葱、濃い緑

(2) 地は経の五枚縹子(経糸の撚はZ撚、袖の部分よりも撚がきつい)

註7の挿図a 満州古衣 背面

註7の挿図b 満州古衣 背面の背部分
牡丹蓮華唐草文様が見える。